
人殺しの街の優しい人達

阿雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人殺しの街の優しい人達

【Nコード】

N2843E

【作者名】

阿雪

【あらすじ】

ユニットリンシングによって完全階級別となった世界。C階級の住人で正義一直線を売りにしている雑誌記者のオズはある日、スラム 別名「人殺しの街」への住み込み取材を命じられる。嫌々訪れたスラムで出会った人々はオズの想像とは大きく外れていて……。

第一話 スラム1

ユニットリンシング。

そう呼ばれる大革命がこの世にはあった。とは、俺のばあちゃんの言葉。と言っても、そのばあちゃんだつてばあちゃんから聞いたわけ、じゃあそのばあちゃんが実際に革命を見たかと言うと、俺は知らない。とにかく、ユニットリンシングは遙か昔の話で、俺が生まれたときには世界はとくに、階級別のユニットに分かれていた。正直、階級の違う人間同士がどうやって一緒に住んでいたのか、俺には想像もつかない。食料の配給とか、店で扱う商品の質とか、階級の違う者がごちゃごちゃいたら、不便でしようがないだろうに。そんなことを考えながら、俺は「ポンプ」に揺られていた。「ポンプ」とは言っても、ようは列車なわけだ。普通の列車と何が違うかといえば、ユニットとユニットを繋いでいるという点だけだろう。俺は、S階級にまでとどく「ポンプ」に乗るのは始めてだったが、繋いでるユニットが違うだけで、DやCにある「ポンプ」となら変わらない。強いて言えば、俺の住むCとDを繋ぐ「ポンプ」よりは座席の座り心地が良い。そして、乗っている人間にもわずかばかりの余裕が感じられる。

正直、自分がS階級に行くことはこの先の将来、どんなに都合良く見積もっても有り得ないと思っていた。思っていたのだが、俺は今、S階級のユニットに向かっている。というのも全ては数日前、俺が仕事の上司に呼び出されたことから始まる。

俺は、C階級のユニットに居をかまえる出版社で記者をしている。俺の生まれはD階級で、階級ユニットを超えての就職は二階から落とした針に糸が通るくらい珍しい。それでも、うちの大将が俺を雇ってくれたのにはそれなりの理由があるのだけれど、そんなことは今はどうだって良い。とにかく、俺はなかなか優秀で、呼び出され

る覚えなんてこれっぽっちも無かった。なのに呼び出しをくらった
ということは、どうせろくでもない仕事の話をされるに決まってい
た。

案の定、俺を呼び出した課長は開口一番

「お前、スラムに行く気は無いか？」

と切り出した。

「はあ？」

俺は思わず聞き返す。

「だから、スラムだよ。取材に行かないか、と言っている。」

取材……。ということは仕事だ、仕事があるというのは何よりだ。

ありがたい。ありがたいが。

「スラムって……」

呟くように言った俺のせりふに課長が眉をよせた。

「なんだ？ スラムだよ。知らないのか？」

「知ってますよ。人殺しの巣窟でしょう。」

慌てて答える。課長は、口元だけでくすり、笑った。

「この街の人間100人に聞いたら、100人がお前と同じように
答えるだろうな。」

その目は明らかに、俺を試している。

「だって、事実そうじゃないですか。」

俺はあえてその誘いには乗らない。

俺には、この世でもっとも憎むべき人種がいる。それが「人殺し」
だ。人の命の大切さから説かなくてはいけない人間などとは話もし
たくない。もちろん、俺が記者という職業に就いている以上、ある
程度の妥協は必要になってくる。だから、俺が人殺しと話したこと
が無いかと言うと、必ずしもそういうわけではない。が、自ら人殺
しに近づいていくような真似はしたくない。ここでうっかり課長の
誘いに乗れば、俺は知らぬ間にとんでもない仕事を請けることにな
るのだろう。正直それは、避けたかった。俺は、俺の意思にだけ支
配されることを常に望んでいるのだ。

「お前、100人が答える回答と同じ内容が書かれた記事を読むか？」

課長の攻撃はまだ続く。

「よみません。」

俺は、はつきりと答えた。

「そうだろう。だから、お前には人殺しの巣窟じゃないスラムに行ってもらおうと思う。」

「はい？」

俺の記憶違いで無ければ、この世で「スラム」と呼ばれているのは一箇所だけのはずだ。そしてそこは、まぎれもなく人殺しの住む場所だ。

「スラムに行つて、人殺しの巣窟じゃないスラムを取材して来い。期間は最低半年。何があつても半年は帰ってくるな。」

「はあ？」

俺は思わず声を大きくする。

「もう手配はすんです。　そうそう、忘れてた。これは命令だから。お前はとにかくスラムに半年行くんだ。以上」

課長は涼しい顔で言い放った。彼にとってはおそらく、その丸くて短い爪につまったごみの方が気になったようで、俺の目を見もしなかった。俺は、課長の爪からかきだされるゴミをただ目で追っていた。

理由を、聞こうと思えば出来た。なぜ、俺なんですか。そう言うだけで。ただ、彼は俺の上司で、数え切れないほどの恩がある。さらに付け加えるならば、彼は俺のことを嫌いではなく、愛情の裏返しなんて洒落た意地悪もできる性質ではない。俺はそれをよく知っているし、俺が知っていると言うことを彼はよく知っていた。つまり、あの取材は最初から断れるはずも無く、いずれは俺のためになるのだろう。もしくは、今の俺に必要なものなのかも知れない。だからといって、彼がそれを素直に言うことはないわけで、俺に足りないと感じているかもしれないことは、結局、自分で判断する

しか方法がない。かくして俺は、憎むべき人殺し達の街、スラムへと足を運ぶことになったのだった。

急に、横方向に働く引力を感じて俺はわれにかえた。どうやら、S階級のユニットについたらしい。

俺の住む大陸　その必要性から俗にヨーロッパ大陸と呼ばれているが　はユニット数が非常に多く、世界最大規模の大陸だ。大陸は全部で五つ。それぞれにA階級からE階級まで、大小さまざまなユニットが点在している。S階級のユニットは世界に三箇所しかなく、その一つがこのヨーロッパ大陸にある。住所で言えば、S-1と呼ばれる地域になる。通常、住所にはアルファベットの前に大陸名が入るのだが、世界に三箇所しかないS階級には大陸名が入らない。後ろに続く数字は、敷地面積の広い順につけられるので、このS-1が世界で一番大きなS階級ユニットということになる。ちなみに、俺の住所はヨーロッパC-3から始まっている。ヨーロッパ大陸のC階級、3番めの大きさの地域に住んでますよ、という意味だ。その後ろにさらに細かい住所が続いていく。

遙か昔のユニットリンシング以来、世界は完全階級別だ。階級は、ユニットリンシング当時の個人保有資産によってすっぱりと分けられたと聞いている。A〜Eまであって、Aのさらに上にSがある。Sが一番のお金持ちだ。生活水準が同じもの同士を一緒の地域に住まわせることで、誘拐事件や強盗事件の防止や、食糧支援の簡略化を図るのが目的だった。当時は反対意見も多くあったと聞くが、信じられない話である。実際、ユニットリンシングは大成功を収めていて、犯罪の防止や、病気の予防、飢餓の解消に大いに役立っている。生活が苦しい家族の隣に大金持ちの家族がいたら、そりゃあ強盗の一つも犯したくなるというものだが、どこまで行っても同じ境遇の人たちだらけなら、そんな気を起こさないのは道理である。同じ階級のもの皆、ほぼ同じ財力しか持たない。一番開きがあるのがS階級だが、あの階級の人たちはそんなことは気にしない。俺が思うに、大きくなりすぎた自分の財力をはかる術を忘れてしまった

のだ。あの人たちはまるで蟻で、象を見るみたいにお金を見ることに慣れてしまつてのだろう。

不毛な考え事をしながら俺は「ポンプ」から降りた。S 1のプラツトフォームは見たことのないようなテラテラ光つた石でできていて、俺の靴の安っぽいゴム底が歩くたびにキュ、キュ、と音を立てた。人影がまばらなせいだろうか、それを気にする人は無い。俺はまるで、氷の上を歩いている氣になつてその石の上を進んだ。滑らないだけいくぶんかましだろうか。思つた途端、足にじやり、と慣れた感触を感じた。自分が前ばかり見ていた事を思い出して、ふと視線を落とすと、どうやらいつのまにかステーションをでていたらしい。検閲がもう一度くらいあるかと思つたが、A階級のステーションとポンプ内でも一回やつたので、それで十分と言うことだろう。

S階級に、着いてしまった。

とりあえず、俺はあたりを見回す。課長の言葉を信じるのなら、迎えがあるはずだ。が、それらしい人物は見当たらない。もしかすると、課長の悪い冗談だったのだろうか。俺は、人殺しの街に行かなくてもいいのだろうか。そう思つたのとほぼ同時に、ぽん、と俺の肩をたたく者があつた。

「オズ？」

手は言つた。

「え？」

俺は答える。

「オズワルド・タラントさんですよ。俺、オリバーと言います。ディーンで紹介で……」

そういえば、課長の名前はディーンだったな。思いながら、俺は振り返つた。と、目に飛び込んできたのは青年である。歳のほどは18、9だろうか。金の髪、緑の瞳の整つた顔だち。高級そうなスーツをかつちりと着込んで微笑む彼からは、上品な雰囲気こそはかとなく漂つていた。

「仲介屋のオリバーと言います。どうぞよろしく。」

彼は手を差し出した。

「は、始めまして。オズワルドです。」

俺はその手を握り返す。オリバーは満足そうにその手を振ってから、先ほどとはうつてかわって子供らしい笑顔を見せた。

「すぐに分かって良かった。俺、あなたの年齢も特徴も何も聞いてなかったんだよね。思ったより若いね。」

その笑顔でも、彼が美形と呼ばれる部類に入るとは間違いない。

「それはこっちのせりふだ。いくつだ？」

俺は思わずあまりにもつまらない質問をした。

「俺？俺は一応20だけど、オズは？」

「俺は26。」

正確にはもう少し27だ。記者は体力勝負。痩せるのも太るのも禁物だ。俺はそれなりに体を鍛えているし、外ばかり飛び回っているせいでいい感じに日焼けもしている。さらに、黒の短髪と黒い目のせいか、20そこそこに見られることが多かった。

「ふうん。」

しかしオリバーはそんなことは全く気にしないというように一つ呟くと、来て、と歩き出した。

「どこに行くんだ？」

俺は慌ててその後を追いかける。

「どこ？どこってスラムだろ。オズはスラムの取材に来たんじゃないの？」

オリバーは微笑む。

「もちろん」

俺は頷いた。

「いくらスラムがS階級の中にあるといっても、さすがにステーションから見える場所には無いよ。移動しないと。」

言って、オリバーはまた笑顔を見せた。

……そう。スラムはS階級の敷地内にある。良く言えば間借り、悪

くいえば寄生しているのだ。S階級の敷地はバカ広い。なのに人口は一握り。土地ならいくらでも余っている。下の方のDやEは敷地も狭くゴミゴミしていて、とても他の人間の入り込む隙がないわけだから、ある意味、利になつていえると言え。

スラムの成り立ちについては、未だに分らないことが多く、ただ一つ分かっているのは、遙か昔のユニットリンシングのその時にS階級の敷地にこっそりと住み着いた人達が居たということだ。そして、その人達が政府の目を盗んで作り上げたのが、スラム。政府の公式発表によれば、当然、その存在は無いものとされている。しかし、スラムが実際に存在していることは小学生でも知っているし、それがS階級の敷地内に存在するということも周知の事実だ。とにかくこれは、ユニットリンシングの際もぐりこんだ彼らに気づかなかった政府の完全なミスで、それを政府の誰一人として認めたくないがために放っておかれていているという、決して解決しない問題なのである。

「多分、四時間くらいかかると思うから。」

俺の前をすたすた歩くオリバーが唐突に言った。

「四時間？歩きでか？」

俺の交通手段は歩きか走りの二種類だ。

「まさか」

オリバーは笑った。その笑顔には、やはりどこことなく上品さが漂っている。人殺しの街の人間の影を感じることは全く出来ない。

「もうすぐ見えてくると思うけど……ほら、あれだ。」

オリバーは前方を指差した。

「車？」

目の前に近づいてくるのは明らかに駐車場だ。

「そう。乗ったことある？」

オリバーは高級スーツのポケットから慣れた手つきで車のキーを取り出すと、それを右手の人差し指でちゃらちゃらと回した。

「バスなら……」

俺は答えた。

車は高級品だ。俺の生まれたD階級は道も整備されていないし、そもそも車が持てるような生活水準の人間は存在しない。つきに一回は食料配給があるし、それがあってもかろうじて衣・食・住を揃えるのがやつとだ。それでも衣・食・住がそろっただけ、俺の階級はましというものだ。E階級に至っては、週に二回も食料配給があるにも関わらず衣・食・住を揃えるのが難しい人間の方が多い。スラムというのはそのさらに下をいくということになるわけだから……俺には想像しがたいものがある。

「バス……ね。Sにバスは存在しないんだ」

オリバーはまわしていたキーを器用に右手でキャッチする。Sにバスがないというのは最もだ。Sの人間は必ず、自家用車とお抱え運転手をもっている。時刻表を見ないと自分の予定も決められないバスなんかを利用するものはいない。

「お前、免許もってるのか？」

促されて、助手席に座りながら俺は聞いた。

「免許？」

彼は、クスリとまたたいた。キーを差し込み、車にエンジンをかける。

「オズ。言っておくけど、スラムは無法地帯だよ。俺が免許なんて……もってるわけないでしょ」

オリバーは相変わらぬ笑顔である。けれども、そのせりふは確実にスラムの住民のものだ。

「安全……なんだろうな？」

本当なら無免で運転なんかするなよ、と叫びたい。しかし、ここはぐっとこらえて俺は最低限の質問だけをした。

「安全さ。年期が入ってるからね。」

そう言っただけオリバーはサイドブレーキを引き、ギアに手をかける。ほとんど何の衝撃もなく発車したそれが、上手なのか下手なのか、車に乗ったことのない俺にはわからなかった。

第一話 スラム1（後書き）

頑張るのでよろしくお願いします。
一言でもいただけると嬉しいです。

第二話 スラム2

「なあ、仲介屋って何をするんだ？」

車が走り出してから、かれこれ三時間はただただろうか。窓の外の景色は無駄にきれいな建物や広場の群れを抜け、いきいきとした木々にきりかわっていた。オリバーの話によると、ステーションからこっち方面に進み続けると、ひたすら自然の風景を楽しめるらしい。政府も、そしてS階級の間人も完全に開発をあきらめた、見捨てられた土地なのだった。

「何って、仲介だよ。仲介屋だもん。」

オリバーは前を見たまま言った。

「だからさ、具体的にはどんなことをしてるのかって聞いてるんだよ。」

俺は、運転手を見た。そうだなあ、と彼は呟く。

「例えばさオズ。殺したい人がいて、その殺人依頼をスラムの誰かに頼もうと思ったら、オズはどうする？」

「殺したい……」

いきなり出たその単語に、俺は少なからず戸惑った。殺したいやつがいて、という前提で始まる話を俺は今まで聞いたことがない。しかし、人殺しの街に住まうオリバーにとっては何の違和感も無く、むしろ自然なだろう。

「スラムって殺しを仕事にしてるヤツがたくさんいるけど、素人じや、その中の誰とどうやって接触を図ればいいのかわからないだろ。そんな時、依頼者と実行者を仲介するのが俺の仕事だよ。」

オリバーの話はまだ続く。

「スラムではさ、基本的に仲介屋を通してしか仕事を請けちゃいけないってルールがあるんだ。だから、色々なことを仕事にしてるヤツがいるけど、皆、外からの仕事を請けるときは必ず仲介屋を通すんだよ。」

「へえ、だつてスラムって無法地帯なんだろう？」

人殺しや、犯罪者がうじゃうじゃといて、好き勝手にすさんだ生活を送っている所。それが俺のイメージするスラムだった。

「うん。法はないけど、ルールはあるよ。ま、行けばわかるさ。」

オリバーはすました顔で言う。もつとも、このオリバーという青年からして、俺のイメージしたスラムとはずいぶんとかけ離れた印象なのである。まず、その服装だ。俺は洋服のブランドについては全くといっていいほど無知だが、それでも見覚えのあるロゴに、見覚えのある模様のネクタイ。靴だつて、先ほどちらりと見ただけだが、安物には見えなかった。話す雰囲気は柔らかで、ほのぼのとした空気さえ感じさせる。動作の一つにしても、荒々しさは全くなく、むしろ絶対の余裕を持っているようにさえ見える。俺はD階級出身だから分かるのだが、金が無く、生活の苦しい人間というのはおうおうにして余裕が無いものだ。そして、余裕がないから人に優しくない。赤の他人、しかも初対面の人間に笑顔を向けることなど、まず無いといっても良い。オリバーは仲介屋という職業柄、さすがに笑顔を見せないというわけにはいかないと思うが、それにしただつて、その目はもつと飢えてぎらぎらしていいはずだ。スラムなどという、その存在すら認められない街で生きていくのに、彼の雰囲気は似つかわしくなかった。

「オズ。もうすぐ見えてくるよ。」

窓の外を見ているようで、実は自分のスラムのイメージばかり見ていた俺は、いきなりかけられた声に驚いた。どうやら、自分で思っている以上に、俺はスラムに行くことに不安を感じているらしい。

「見えてくるって……森しか見えないが。」

窓の外は相変わらずの自然の景色だ。しかも、すっかり落ちてしまった日に、鬱蒼とした森の景色が不気味さをひきたてる。まさか、この森の中で生活をしているとか言い出すのだろうか。

「この森を抜けたところだよ。」

俺の心を読んだようにオリバーが言う。

「そっか……」

俺は、今度は本当に窓の外の景色に目をやる。しかし、俺にはただの暗闇しかみえなかった。と、突然、相当数の灯りが目に飛び込んできくる。それはどんどん近づいて、目の前にはあっという間に、街が出現した。

「着いたよ。」

言ってオリバーが車を停める。

「ここが……」

俺はその先の言葉をつむぐことが出来なかった。

これがスラムだというのなら、にわかには信じがたい。確かに、S階級の街並みを見た後だと、ごみごみした印象はぬぐえない。一軒あたりの敷地面積は非常に狭く、家と家のすきまはほとんど無い。

しかし、そこには家と呼ぶに十分すぎるものが建っている。今は暗くて、全ての家が真っ黒に見えるが、どうやらコンクリ造りらしく、三階建て、四階建てが多いのではないだろうか。どの家にもしっかりと電気がともっていて、驚いたことに街灯すら、ちらほらと確認することが出来るのだ。これだけの電力を一体どこから確保しているというのだろうか。それに、皆がみんな、電気代を払える生活をしているというのだろうか。オリバーの服装といい、おれはスラムについて、知らないことが多すぎるようだ。

「降りて。」

オリバーに促されるまま、俺は車を降りる。一歩、足を前に踏み出すと、何かにつまずいてバランスを崩した。

「おっと。」

俺は思わず声をあげる。

「その辺から道が石畳になってるから気をつけて。」

オリバーが教えてくれた。石畳とは、またずいぶんと贅沢だ。

「悪い。俺、夜目がきかなくて。」

「夜目が利かない？この人間て聞いてるけど。」

オリバーは車を道にとめたまま歩き出した。

「今はCに住んでる。生まれはDだ。」

俺はなんとか、その後を追いかけた。

「ああ、なるほどね。」

オリバーは妙に納得したように頷く。

「何か関係あるか？」

俺は聞く。

「あるよ。夜目が利かなくなる原因の大半は、幼児期の栄養失調だ。」

言って、オリバーはすたすた歩いていく。

「どこに行くんだ？」

俺は先ほどから、質問ばかりだ。

「酒場だよ。取材したい職業とか具体的な要求がなかったから、とりあえず居候先だけ決めておいた。取材したい対象がはっきりしたら、また俺に声をかけてよ。」

またオリバーの微笑みだ。俺は頷く。そしてそのまま、促されるままに酒場の戸をくぐったのだった。

酒場は、酒場だった。しつかりとした酒場だった。店内は薄暗く、無造作に並べられた木造りの椅子や机が貧乏くさくはあるが、電気も灯っているし、酒も振舞われている。料理だって並んでいた。

「ここが居候先なのか。」

実は、状況が全くつかめていない。

「いや、そうじゃなくって……居候先の相手だよ。多分いると思うんだけど。」

オリバーは店内をぐるりと見回す。と、その視線が一箇所でぴたりと止まった。

「いたか？」

俺が聞く。

「いたよ。」

言って、オリバーはカウンターに向かって歩き出した。どうやらそ

の相手はカウンターにいるらしい。

「キース。」

オリバーはカウンターにいる一人の男に声をかける。

「よ、オリバー。」

そう言つて振り向いた男は、青い切れ長の眼。しかし、けつして細いわけでは無く、その眼はしっかりと前を捉えている。歳は俺と同じくらいだろう。通つた鼻筋にオレンジっぽい赤髪。大胆不敵そうにニヤリと笑うその顔はオリバーとはまた違った意味で美形だった。

「ステーションまで行つてきたんだって。」

彼の手にあるのはウイスキーだろうか。カラカラと氷をならしながら言つた。

「そうなんだよ。往復八時間。すっぱー疲れた。」

オリバーはキースと呼ばれた男からウイスキーのグラスを奪つて少し口に含んだ。

「お疲れさん。となりにいるのがそう?」

そのコップを取り返してキースが言う。

「どうも、はじめましてオズワルドです。」

俺は右手を差し出す。

「どうも、キースです。」

彼は屈託のない笑顔で俺の手を握り返す。オリバーといい、キースといい、スラムの人間はずいぶんと簡単に笑顔を見せる。俺にはそれが意外だった。

そのまま、酒を飲みつつ、軽い自己紹介と雑談をしているとオリバーのあくびが目立ち始める。ややあつて、彼は帰る、と言い出した。

「お、おい。ちょっと」

俺は右も左も分からないスラムで突然投げ出されたような気分になつて、思わずオリバーを呼び止めた。

「心配いらないよ、オズ。キースはすごく面倒見が良いんだ。それに…… 同い年だろ?」

オリバーがウインクをした。俺はそれを呆然と見つめる。

「あいつ、しょうがねえなあ。」

後ろから聞こえた声に振り向くと、キースがグラスに入ったウイスキーを一気にあおったところだった。

「あの、俺……」

どうすればいいか分からず困っていると、キースが勢い良く立ち上がった。カウンターにお金を置いた。

「来いよ、オズ。家に案内してやる。」

俺はそれに従うほか無かった。

キースの家は、酒場の隣の通りにある三階建てのコンクリの家だった。両側の建物が高いせいで、追い詰められて、狭い隙間にキュウキュウと建てられた印象がある。入り口には五段ほどの階段があり、それを上ると小豆色のドア。あけるとすぐに、キッチンとダイニングが顔を覗かせる。

「一階は風呂とトイレとキッチン。これは共同な。二階は俺の部屋。三階がオズの部屋だから。」

どンドンと階段を登りながら早口に説明していく。踊り場はほとんど無い。二階、と紹介されたところには二つのドアが見えた。さらに狭くて急な階段を登っていくと、同じように二つのドアが姿を現す。キースは左側のドアを開ける。

「こっちがオズの部屋。反対の部屋は……別に入っちゃいけないわけじゃないけど、普段は鍵がかかってる。どうしても見たいなら俺に言ってくれればいいから。」

そういつて、俺のための部屋に俺を招きいれる。

「荷物置いて。」

言われて俺は、ベッドの上に荷物を置く。決して広くはないが、パイプベッドに小さな机。窓も一つついている。居候先としては上々だ。

「正面の部屋は何なんだ。」

俺は、窓のカーテンを閉めているキースの背中に話しかけた。

「商売道具がおいてあるんだ。さすがに他人に触らせるわけにはいかないから、俺と一緒のときのみ入室可能ってことで。」

キースは振り向いて微笑んだ。

「商売道具？」

俺は首を傾げる。そういえば、オリバーからキースの職業を聞いていない。これだけの一軒家に一人で住んでいるのだ。そうとうな稼ぎなのだろう。

「そう。商売道具。オリバーから俺の職業きいてないの？」

俺は首を振った。

「へえ。」

彼は口元だけで笑ってみせる。ポケットからなにやら鍵の束を引っ張りだして部屋の外へ歩き出す。俺は着いていく。

俺の部屋の正面のドアノブに手をかけると、鍵が閉まっていることを確認してからゆっくりと鍵を開けた。すつ、と何の抵抗も無く空いた何の変哲も無いドアの中に見えた景色は……俺の想像を遥かに超えていた。

「こ、これ、これ……」

俺の声は思わず上ずった。

「すごいだろ、俺の自慢の商売道具。」

キースは大げさにその両の腕を広げて見せた。俺は部屋の中に一歩だけ脚を踏み入れて、ぐるりと見回す。見渡す限りの銃。弾丸。片隅にはなにやらわからない機械。

「キースの商売って……」

俺は浮かされたように聞いた。

「スラムで生きていく方法は大きく二つだ。体を売るか、命を賭けるか。」

キースは二本だけ立てた自分の指の片方をつかんで、くすり、と微笑んだ。

「俺は後者だ。本業は暗殺だよ。」

「暗殺……」

「そ。ま、仕事が無いときは何でもやるから実質、何でも屋かなあ。」

平然と言う彼を、怒鳴りつけなかったのを褒めて欲しい。俺は前にも述べたが、人殺しをこの世でもっとも憎き存在としている。そこに反省の色をにじませない人間は、同じ人間とも思いたくない。けれども彼は、あくまでも居候先の主人だし、ましてやこれから一ヶ月の取材対象だ。俺は、居候一日目から住処を追われるほどバカじゃない。最も、ここで怒鳴りつけて命をなくすのが怖かったのもある。

「依頼はオリバーを通してくれよ。」

無邪気に微笑む彼を見て、俺はスラムに来てしまったのだと自覚した。それと同時に、眠れない夜を覚悟した。

どこまでも続くよどんだ空気。家は無く、着るのも食うのも困った人達が、路上にたむろする。その横を、大量のねずみが走りぬけていく。奪い、盗むことに慣れ、現実逃避のために横行するドラッグと、それに追隨する殺し。自分を守るためと、誰もが武器を手にし、それを振り回す街。それが、俺のイメージしていたスラムだ。

が、実際のスラムの朝はさわやかだった。こんがりとやけたトーストの香りに意識を覚醒され、眠い目をこすりながら一階まで降りていくと、あさからこ機嫌なキースの鼻歌が聞こえてきた。

「おはよう。」

俺はもそもそと挨拶をする。

「おつ。思ったより早く起きたな。ベーコンエッグでよければいいでにつくるけど？」

あまりにすがすがしい笑顔に、俺はたじろいだ。キースは暗殺者と名乗った。昨日の夜、確かにそう言った。ということは、あのベーコンエッグを焼いている手で誰かの命を奪ったことがあるのだ。それどころか、それを商売としているのだ。俺は、手馴れた手つきでフライパンを握っている大きな手を眺めた。

「食費なら家賃に含まれてるから心配するなよ。」

キースが見当違いな予想をたてながら俺の顔を覗き込んだ。

「あ……じゃ、お願いしようかな。」

俺は我にかえってダイニングの椅子に腰を下ろした。スラムに着いて最初の食事は、どうやら人殺しの作った目玉焼きらしい。

「了解、トーストは勝手にやってくれ。」

そういつてキースは、食パンの入った袋を指す。まだ、ふわふわのおいしそうな食パンが顔を覗かせている。と、その傍らに無造作に積み重ねられた2、3冊の雑誌が目にとまった。

「これ……」

俺は思わず手にとる。それはC階級を中心に売られている一般的なスクープ雑誌で、表紙には黄色い派手な字で「フォルデッシーモfff」と書かれている。

「ああ。お前の書いてる雑誌だろ。一応読んでみた。」

読んでみた、ということはこの男は字が読めるのだ。

「どうだった？」

俺は律儀に感想を求めてしまう。一番上についているのは先月号で、確か近所の女を殺害したB階級の銀行員の男の記事を書いたはずだ。「どうって……なんか真っ直ぐな感じだな。」

キースがフライパンに落とした卵が、じゅわ、といい音をたてた。

「真っ直ぐ？」

褒めているのかけなしているのか分からないコメントに、俺は首を傾げる。

「うん。なんというか、白黒がはっきりしていて混じりけの無い感じだ。」

キースは器用にフライパン返しを卵の下にさしこんでいる。

「単純ってことかよ。」

俺は袋から食パンを一枚とりだして、テーブルの上に置かれたトースターに突っ込んだ。

「そうとも言うけど、ちょっと違うかな。」

言ってキースはベーコンエッグを皿にうつした。自分の分と俺の分の皿を持って、テーブルの自分の席につく。

「オズ。お前ってさ、犯罪者は許せないってクチだろ。人殺しなんでもってのほかだ。」

キースは口元にかすかに笑みを浮かべて俺の方を見た。

「え？」

恐らく俺は、よっぱど間抜けな顔でもってキースを見たことだろう。「そんなヤツの書く文章だったよ。コレ。よくスラムなんかに来たよなあ。」

俺の視線は、言葉をさがしてあちこちをうろつろとした。キースの言ったことは凶星だ。俺は、本当に犯罪も人殺しも憎んでいる。でも、それを口にして良いのだろうか。この人殺しの街で。俺は一つ息についてキースの目を見た。キースには全く気にした様子はなく、コップにミルクを注いで俺の前に差し出してくれた。この男に、嘘は通じない。俺のわずかな直感がそう告げていた。それが、どうやって培われたものなのか俺には検討もつかないが、ごまかし続けて共同生活をしていくことは恐らく難しい。そもそも俺は、嘘やごまかしといった類のものを、全く使うことの出来ない人間なのだ。

「何だよ？ 食べないのか？」

キースは微笑んで、俺にベーコンエッグの皿を勧めた。

「キース。」

俺は一度呼びかける。

「なに？」

キースはさつさと卵の白身をフォークで切り取りだした。

「キース。俺、お前の言った通り人殺しは大嫌いだ。」

キースは切り取った白身を口に運んだ。

「うん。当たり前だろ。」

彼のフォースが口から離れゆらゆらと揺れて俺を指した。俺は、何となくそれを追ってしまう。が、

「本当に嫌いなんだ。人を殺す人間を軽蔑している。隠してたって

しょうがないから言わせてもらっ。」

俺はしっかりと視線をキースに固定して言った。キースは相変わらずベーコンエッグに夢中だ。俺はかまわず続ける。

「だから、スラムの人間と上手くやっていけるとは思わない。でも、仕事だから半年は世話になる。世話になることには本当に感謝してるし、お前が人殺しってことと、俺が感謝を示さなきゃいけないことは別物だって……」

「ストップ。」

俺の言葉は途中でさえぎられた。キースは俺を真っ直ぐにフォークで指し示す。ベーコンエッグから俺に視線が移った。

「オズ。お前さ、物事を理屈で考えすぎだ。俺に言わせれば、とりあえずお前はスラムを何も知らないわけだし、頭だけで全ての答えを出すのは安直に過ぎるってもんだ。俺は学は無いけどその分、楽な生き方を知ってるぜ。」

「え？」

俺は思わず聞き返す。一体どういう意味だろう。

「だから、俺は答えだけ聞かされるのは嫌いだし、言葉なんてものは何の保障もないくだらないものだと思ってる。オズのことは俺が見ていて自分で判断するし、その対応も俺が俺の考えで決める。だから、お前もお前の好きなようにすれば良い。ここはそういう街だ。」

キースはくすくす、と笑った。

「つまり？」

俺は聞く。

「もっと気楽にこういうことさ。とりあえず、今は朝食を食べるのが良いと思う。」

言ってキースはフォークで俺のベーコンエッグを示して口だけ笑う。俺がここで何かを言ったところで、それは彼にとってあまり大きな意味をもたないようだ。俺は仕方なく、焼けたトーストにバターをぬって口に運んだ。トーストもバターもすごくおいしい。

「で、お前、今日はどうするつもりだ？」

口の中いっぱいにとーストをほおぶりながらキースが言った。

「どうって……何も決めてないけど。」

俺も負けじともぐもぐしながら答える。

「そりゃあ丁度良い。俺も今日、仕事が入ってないから良かったらスラムを案内してやるよ。これからここで生活するわけだし、取材対象をみつける上でも、この街のことを知っておいたほうが良いだろう？」

キースの言うとおりだった。俺はこれから一ヶ月ここで生活しなくてはならない。何がどこで手に入るのかとか、一人で歩き回っても安全なところとかをしっかり把握しておきたかった。

「お願いするよ。」

まるで、友達同士の会話のようだ。俺は、キースの口から出た「仕事」が何なのかを漠然と想像しながら返事をした。

第二話 スラム2（後書き）

二話連続投稿です。一話目共々よろしくお願いいたします。
そして、まだ続くので今後もよろしくおねがいします。

第三話 キャロライン 1

俺がスラムで最初の取材対象を見つけたのは、俺がスラムに来て丁度四日目の昼だった。初日のキースの親切なスラム観光と、その後の二日間で、俺はわずかながらだが、スラムの全体像を把握することに成功していた。

まず、スラムは大まかに三つの階層に分かれている。S階級の都市部からは大分距離があり、また間に大きな森が立ちはだかつているせいで、階級を持っている人間がその姿を捉えることは難しいが、スラムは広く、そしてきれいな街だった。きれいというのは、外観が優れた建物が多い、とかそういうことではない。

確かに、道が全て石畳なのには驚かされたが、明るくなって良く見ると、使われている石は明らかに安物で質が悪そうだし、モザイクで模様が造ってあるといった洒落たところも見当たらない。コンクリの家々も統一感があつてなかなか良い趣だが、質素で冷たく暗い印象はぬぐえない。

俺が言うきれい、はそんなことではないのだ。つまり、ホームレスの類が居ないのである。野良犬、野良猫も少ないように感じる。俺の生まれたD階級は、一応家を持つていることが条件に入っていたので、道で寝起きをしている人間は居なかったが、昼間になれば仕事を求める大人たち、食べ物を求める子供たちが、ふらふらと徘徊していたものだ。食料や生活用品の配給が定期的にあるといっても、生活はかなり苦しかったし、政府の用意してくれる仕事のほとんどは、きつい肉体労働で女子供が働くことは至難の業だった。疲労で精神的余裕を失った人間も多く、酒や、ドラッグにおぼれた者が道に転がっていることなんて、日常茶飯事だ。が、どうやらスラムにはそういった人達は居ないようだ。

キースの家のある第一階層はもとより、第二階層、第三階層でも同じことが言えるようだった。最も、スラムの階層分けは、所有金

額によるものではないとキースに教えてもらった。キース曰く、だいたい職業別、とのことだ。だいたい、というのがいかにもスラムらしい。

キースの住まう第一階層は、裏稼業で食べている者が中心。つまりは、暗殺、運び屋、何でも屋。さらに、かなり立派な歓楽街なんかもある。

その奥にあるのが第二階層。S階級とまではいかないが、A階級なみの商店街がある。店舗の数も、そこに並ぶ商品の数も非常に豊富で、また古さも感じさせない。俺がただただ目を丸くして見ていたら、キースがそのうち仕組みを教えてやる、と嬉しそうに笑っていた。ちなみにこの商店街、商品の数と比例して値段の0の数も一個、もしくは二個多い。俺は、キースが家賃に食費を含んでくれたことを心から感謝した。

スラムの一番奥にあるのが、第三階層。俺が最初の取材対象に選んだのも、ここの住民である。第三階層に住まうのは、職人達。スラムの裏稼業を影ながら支えてる人達、ということになる。また、キースの話によると、教会もあるらしい。宗派は不明だ。

こうして見ると、スラムは街でありながら、一つの巨大な組織といった感が強い。どうやら、お互いがお互いを上手にカバーしながら生活をしているらしいのだ。その最もたる象徴が、スラムの最大のルールに見える。

『スラム内での殺しはご法度』

意外なことに、人殺しの街の住民は、仲間同士での殺し合いを最大の禁忌としていた。それでもスラムが人殺しの街、人殺しの巣窟と呼ばれるのには、どうやら第一階層の人間にその責があるようだが、不思議なことに、スラムの住民のほとんどは、第一階層の人間にたいそう感謝の念を抱いているのだ。

最も、俺が最初の取材対象とした人物は、第三階層に住みながら、職業としては第一階層にかなり近いものだった。彼女の名はキャロライン。運び屋を生業とする、23の女性だった。

その日は、キースが突如、昼食を食べに行こうと言いだした。この男は、大振りな行動のわりには気のつくヤツで、俺が取材対象を見つけれなく焦り出したのを、感じていたのだろう。俺はもちろん、お金がないので断る。スラムの物価は非常に高い。俺の給料では、たちまち破産してしまう。しかし、これも家賃に含まれた食事代の内、というキースに負け、俺たちは男二人悲しく、外食に出かけたのだった。キャロラインに会ったのは、その帰り道だ。向こうが、キースに声をかけてきた。

「キース。仕事は順調？」

彼女は色あせた茶色の髪を肩にかきあげながら言った。短いＴシャツにホットパンツ、日に焼けた小麦色の肌がまぶしい。身長は１８０ｃｍ近くあるだろう。抜群のスタイルの彼女は、しかしあまり顔には恵まれていなかった。卵形の輪郭は理想的だが、低めの団子鼻、細めのブラウンの目。キースの顔を見ながら日々を過ごしていると、すっかり感覚が麻痺してくるのか、彼女の顔も十分平均的なのだが、美女とは言いがたかった。

「まあ、順調だよ。それなりにね。」

キースが答える。キースと歩いていると良く分かるのだが、彼は非常に顔が広い。どの階層に出かけても、決まって誰かに声をかけられた。

「それは良かったわ。ところで、そちらは？見ない顔だけど。」

彼女は俺に微笑みかけた。

「ああ。コイツはオズって言って、スラムを取材に来た記者だよ。」キースがあっさりと紹介する。言うておくが、俺にはオズワルドという立派な名前がある。が、この街の人間にはフルネームを名乗る習慣がないようだ。どうしたって呼びやすい方で紹介される。

「へえ。記者。」

彼女は目を大きくした。同時に大きな口が微笑みをかたどる。

「はじめまして、オズです。」

俺は手を差し伸べた。

「始めまして。キャララインよ。キヤルと呼んでね。」

キヤルは俺の手をしっかりと握り返す。この街の人間は、記者という人種に全く抵抗が無いらしい。人殺しや、犯罪者が多いと聞いていたし、実際、多いように思う。それでもオリバーやキール、そしてキヤルにいたるまで嫌な顔をした人間は一人も居なかった。

「キヤルは運び屋をしているんだ。」

キースが付け加える。見ると、その手には大きなキヤリーバッグが引かれている。最も、それが仕事道具なのかどうかは、俺には判断しかねた。

「オズは、何の取材に来てるの？」

キヤルが俺に顔を近づけた。俺は、それを決めかねて悩んでいたわけで、正直その質問には閉口した。

「や、あの……殺しの街じゃないスラムを……」

俺はなんとかそれだけは言う。何の具体性もない、我ながら情けない答えだった。

「へえ。殺しの街じゃないスラムか。それは俺も始めて聞いたな。」
キースが切れ長の目を少し大きくした。そういえば、彼には仕事内容を話したことが無いな、とその時気がつく。

「なかなか立派なテーマねえ。私達を、おもしろおかしく書いた方が簡単じゃない。」

キヤルが大きな口でからからと笑う。もちろん俺には、人殺しの話が面白おかしく書けるわけではないけれども。

「でもさ、それだったらキヤルなんかは、良い取材対象になるんじゃないか？」

キースが、俺の肩に手を乗せて呟いた。

「キヤルが？なんで？」

俺は聞き返す。

「いや、だって彼女、この界限じゃ珍しい、殺しを引き受けない運

び屋なんだよ。」

「はあ？」

俺は首を傾げた。運び屋というのは、物を運ぶ仕事だろう。そもそも殺しの依頼などは受けないものなのではないだろうか。

「オズのためにお得な情報を教えてあげるわ。」

俺の顔を読んだのだろう。キヤルが自分の人差し指を唇にあて、微笑んだ。

「お得な情報って？」

俺は素直に聞くことに決める。

「あのね、運び屋というのは物を運ぶ仕事だけど、運ぶ物がまだ生きていたらオズはどうすると思う？」

「生きて……。つまりペットとか？」

「やあだ。」

彼女はクスクスと笑った。キースのおさえた笑い声も聞こえる。

「違うわよお。たとえば死体の運搬を頼まれて、でも依頼を受けた時点で運ぶべきものが生きていることがあるでしょ？」

その問いに、俺は答えることが出来ない。が、おそらくあるのだろう。彼女の顔がそう語っている。

「そうだった場合、方法は三つなのよ。」

キヤルは指を三本立てた。

「例えば、殺しの部分は俺みたいな殺しのプロが請け負うパターンが一つだな。運ぶところだけ運び屋に任せる。」

キースが口を挟む。

「そう。でも、それじゃあ殺し屋と運び屋、両方を雇わなくちゃいけないから高くつくのね。でも、もっと安くあげる方法もあるのよ。」

「オプションをつけるパターンだな。俺も何度か受けたことがある。」

キースがまたも口を挟んだ。

「そうよ。殺し屋か、運び屋に追加料金を払って自分の仕事に伴う

作業を全てやってもらうの。」

つまり、殺し屋の場合はその後の運搬作業を、運び屋の場合はその前の暗殺作業を同一人物が行うということだ。

「ま、これには問題もあってな。お互い、専門じゃないほうの仕事の難易度がある程度低くないと難しい。俺のばあい運びは専門じゃないから、あんまり難易度が高いと受けられない」

キースが何かを思い出すように視線を漂わせながら言った。キヤルはその様子を優しく、本当に天使のような微笑で見てから、ふ、と俺の方を向く。

「難易度を判断して、仕事を割り振るのは仲介屋の仕事なんだけどね。とにかく私は、そういった殺しがオプションについている依頼は受けないの。」

それは、俺には当たり前のことのように思えた。殺し屋がいるのだから、殺しは殺し屋がやればいい。他の仕事を選んだ人間が、殺しを安請け合いするものではない。しかし、それがスラムの常識で無いことは、二人の表情を見れば一目瞭然だ。

「それは貴重なことなんだな？」

キヤルは自信たっぷりに頷いた。

「どうする？」

キースが聞いてくる。俺に、選択の余地は無いように思われた。

「出来れば、取材に協力してもらいたい。」

俺は、キヤルの目を見て少し、小さな声で言った。

「お安い御用だわ。」

キヤルが微笑む。

「でも、これって勝手に依頼を請けちゃっていいのかしら？オズつて、担当の仲介屋が居る？私、報酬はいらないけど。」

「一応、オリバーに一言断ったほうがいいな。」

俺が答えるより早く、キースが答える。

「オリバーに？」

俺は聞き返した。

「そう。お前の行動は把握しておきたいと思ってるはずだ。」

言って、キースがポケットから電話を取り出した。携帯電話だ。俺も、スラムに取材に来る際に会社から一つ手渡されているが、触ったことは愚か、見たことさえほとんど無いその機械を、使いこなすことは出来なかった。キースは、もちろんなれた様子でその機械を操作し、あつという間にオリバーに繋いでしまう。そのまま、2、3言葉を交わしただけで交渉を成立させると、俺に向き直った。

「キヤルとの交渉成立で大丈夫だってさ。ただし、仕事が終了したら報告するようにって。」

これが、スラムのルールというヤツだろう。どうやらこの街において、仲介屋というのはかなり優遇される存在であるらしい。まあ、すべての仕事を仲介屋から紹介されるということは、仲介屋をないがしろにしたら仕事にありつけなくなるということだ。それを考えれば、彼らの気の使いようも当然といえば当然である。

「わかった。報告するよ。」

俺は頷く。

「それとキヤル。本当に報酬は無しでいいのか？オズにはオリバーがつくから交渉も出来るぞ？」

キースが言う。話から察するに、キースやキヤルのような実行部隊は金銭の交渉をする権利がないようだ。必ず、仲介人の立会いが必要なのだろう。

「いないわよ。」

キヤルが笑う。その笑顔はさっぱりとしたものだ。策略の香りはしない。

「そうか。なら、いいんだけど。」

キースは携帯電話をポケットにしまった。

そのまま、明日の集合場所と集合時間を告げられ、俺達はキヤルと別れる。俺のスラム取材の第一歩がやっと、動き出した。

第三話 キャロライン1（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。
ジャンルに迷っています。

ぜひ、あなたの思うジャンルと共に感想を一言いただけると嬉しい
です。

第四話 キャロライン2

「その格好だめ。着替えて」

朝、キヤルは俺と顔をあわせた途端に、俺をはつきりと指差して言った。俺は服装には全く興味が無いが、だからと言って開口一番駄目だしをされるほどひどくは無いはずだ。

「なんで。動きやすいし、これが良いんだ」

俺は生意気にも文句を言ってみるが、キヤルの明らかに昨日と違う装いを見れば、俺の格好はやはり好ましくないのだろう。

「今日の仕事はS階級に行くのよ。そんないかにも安物の服、着ていくわけには行かないわ」

パリッとしたワンピースジャケットに黒のストッキング、高級そうなエナメルの高ヒールをはいたキヤルは、それでも、昨日と同じキャリアケースを持っていた。

「そのキャリアケース、いつも持ち歩いてるのか？」

俺は気になって聞いてみる。

「そうよ。このキャリアケースに収まる範囲の荷物だったら安いわよ。そんなことより、服をなんとかしなきゃ」

キヤルはわざとらしく眉間にしわを寄せた。

「言っておくけど、高級な服は持ってない」

俺が言う。

「そんなの私だって持ってないわよ。来て」

キヤルは微笑んで俺を手招きした。俺は、とにかくついていくしかなかった。

キヤルに案内されて着いたのは、スラム第二階層の商店街の一角。ぼろくて小さな服屋のような店だった。とにかく所狭しと服がかけられていて、それらをかきわけないととても前に進むことができない。

い。

「マルビン！ いる？」

キヤルが声を張り上げた。

「その声は、キヤルだな」

言つて、服の間から顔を出したのは、しわだらけの小さな顔だった。目だけがやたらと大きくて、ギョロギョロとしている。俺やキヤルと並ぶと、背もやたらと小さい。歳は……どうなのだろう。D階級出身の俺から見ると50代後半といったところだが、S階級の感覚で言えば70代といったところか。食料事情が大きく違うため、見た目から歳を判断することは俺には困難だった。

「彼の衣装を用意して欲しいんだけど。S階級の若者らしいのを」

キヤルがマルビンと呼ばれた彼に向かって言う。

「始めてみる顔だな」

マルビンは値踏みするみたいに俺を見る。

「オズよ。C階級で記者をやってるんですって。スラムの取材に来てるのよ」

この調子で紹介をされたら、俺はあつという間にスラムの有名人になれそうだ。

「ふむ。俺はマルビンだ。どうぞよろしく」

彼もまた、記者という職業に抵抗はないようだった。俺は、マルビンとしっかり握手を交わす。

「あの、この店は何なんですか？」

俺は、きよろきよろとあたりを見回しながら聞いた。

「貸衣装屋」

キヤルが簡潔に答える。

「貸衣装？」

俺の知っている貸衣装屋は、パーティーの時なんかに着るタキシードやドレスを扱っているイメージだが、ここには普段着に近いものが多いように見える。最も、貸衣装を必要とするような場所に行った経験が無いのでなんとも言えないが。

「私のこの服も貸衣装なのよ。普段使わないものは買う必要ないでしょ」

キヤルが自分のコートをつまんで見せた。

「でも、仕事で使うじゃないか」

俺はキヤルの全身を見ながら言った。つまり、仕事着というべきものなのではないかと思ったのだ。

「使わないときのほうが多いのよ。今回はたまたまS階級にいかんきやいけないけど、普段は裏の仕事だもの」

なるほど、と俺はひとつ頷く。

「つまり、必要なときだけ衣装を借りるんだ？」

「そう。Sに行く時はSらしい服。Eに行く時はEらしい服を借りるの。オリバーとかは自分でS階級っぽい服を持ってると思うけどね」

「オリバー？ 仲介屋の？」

「そう。仲介屋ってS階級の人間を相手にすることが多いから」

仲介屋がS階級の人間を相手にすることが多い。それは

「つまり……」

「S階級はスラムのお得意様よ。特に政治家とかね。自分の手は汚したくない。でも、厄介ごとは解決したい。かなりの高額でもぼんと払うわよ」

「そ、そんな事、言っちゃって良いのかよ？」

平然と言うキヤルに、俺の方が慌ててしまう。

「良いのよ。私の発言なんて、政治家の前じゃ何の力も持たないわ。そもそも、スラムは存在しない街。住人も存在しない人間よ」

キヤルは、友達の恋をばらしてしまったかのように楽しそうに笑うけれど、俺は思い出していた。ここはスラムなのだということを。

結局、俺の経済状況を気遣ったマルビンが、初回限定とかで衣装をタダで貸してくれ、俺はS階級の若者風という高そうな服に着替えてスラムを出発した。

これまた無免許のキヤルの運転で、やっぱりレンタルの車に乗って二時間。着いたのはヘリポートだった。そこからヘリでさらに二時間。ステーションなんかとくに通りこし、俺は、見捨てられることの無かった本当のS階級の街並みを拝むことになる。といっても、そこは居住区ではなく繁華街。目がちかちかするほどのネオンサインを灯して建つ高いビル群は、そのほとんどがカジノやキャバレー。キヤル曰く、S階級自慢の「大人のための遊びの街」だそうだ。お金持ちの道楽といったところだろう。

そんな街に、一体何を外から届ける必要があるのか疑問に思い、俺はキヤルのわき腹をつついた。

「わざわざスラムの人間を使って、一体なにを運んでるんだ」

楽しそうににぎやかな街の様子を眺めていたキヤルは、俺の質問に目を細めた。

「知らないわ」

言って、口元だけで笑う。

「知らない？ 自分で運んでる物なの？」

ええ、とキヤルは頷く。

「私が知ってるのは……これがナマモノかということと、こわれものかどうかということだけね。扱いに必要な注意は聞け。仕事だもの」

かわいく首なんかをかしげてみせる。

「でも、気になるだろ？」

というか、俺は気になる。

「別に。依頼者の事情なんてどうでもいいわよ。払うものさえ払ってくれば詮索はご法度よ。それに……届け先を聞けばだいたいの予想はつくものよ。知らない振りをするのも商売だわ」

確かに、中身を話す必要が無いというのは、商売繁盛の秘訣かもしれない。スラムに依頼が回ってくるものなど、大半がやましいものに違いないのだし、今回のモノについても、ある程度の予想はできていえるということならば、それで十分なのだろう。

「で、予想される中身を聞いても良いか？」

俺はだめもとで聞いてみる。

「ついてくればオズでも予想がつくと思うわ」

さすがにはつきりとは言えないようだが、それでもどうやら結果的には中身がわかりそうである。

俺は、キヤルについて光の海を渡っていく。「大人のための遊びの街」は人が多く、けれども歩くペースは非常にゆっくりで、無駄に着飾った人たちが奥行きのない笑みを浮かべて行きかう。俺達も、その波に上手に乗って歩くよう、キヤルから指示がある。正直、もう少しコソコソと身を隠しながら歩くものかと思っていたが、キヤルは堂々としたものだ。あらゆるものが珍しくてキヨロキヨロしうになるのを必死でこらえている俺のほうが、よっぽど不自然に違いない。

ふと、キヤルが人通りを避けるようにわき道にそれた。

「キヤル？」

俺が聞くと、すつ、と人差し指を口に当てる。何か、様子がおかしい。俺は、黙ってキヤルに体を近づけた。

「つけられてるわ。あの人ごみの中じゃさすがに手を出してこないだろうけど、これからどんどん人の少ない方に行くからね。狭い路を使って片をつけちゃうわ」

言われてみると確かに、こんな狭く、ごみごみとした路地なのに、背後に人の気配がある。

小さな声で話す彼女に、焦りの色は伺えない。

「前に積み上げられてる木箱が見えるわね。合図をしたら、あそこまで走って身を隠してて。そのくらいの運動能力は期待できるわね？」

俺は無言で頷いた。二人の間に緊張した空気が流れる。俺は、手にじわじわと汗をかいてきた。キヤルから流れてくる、少しの空気も見逃せない。それを掴む自信はある、が……。

「オズ！」

途端、キヤルが叫んだ。俺はもちろん、その少し前にキヤルに緊張が走ったのが分かっていたので、素早く反応して猛ダッシュをする。転がりこむように木箱のかげに隠れたのとほぼ同時に、パン、パン、と乾いた銃声が響いた。

恐る恐る木箱の影から顔を覗かせると、これまた高級そうな黒いスーツに身を包んだ男が二人、キヤルに銃口を向けている。俺の生まれたD階級ならいざ知らず、S階級でこんなに簡単に発砲が出来るなんて驚きだ。

「顔出さないで！」

と、キヤルは叫ぶが、こつちだつて記者の端くれだ。ネタになりそうなことから目をそむけることなど出来ない。それにキヤルが心配ではないか。相手が持っているのは、明らかに人殺しの道具。それを、彼女はとうするとうのだらう。人を殺さないというこの運び屋は。

先ほどまで見え隠れしていた二人組みの男がはつきりと姿を現し、いよいよキヤルに狙いを定めた、と思ったその時だった。キヤルはあまりにも自然にその服の下から銃を抜いた。

まず銃を持っていたことに驚いて、次にそれを人に向けて撃っていることに驚いた。ためらいは無い。あつという間にその照準を二人の人間に合わせると、打ち抜く。もう一度、打ち抜く。腕は良いのだらう。二人の男は声の一つもあげることなく、その場に崩れたのだった。

冷たい瞳。しなやかに動く長い手足。あれは、誰だ？キヤルつてもつとこつ……かすれた柔らかさをたたえた女性だった。

「ふう。よし」

キヤルがすつきりした顔をして、俺の方へ近づいてくる。

「オズ。もう大丈夫よ」

銃を服の下にしまいながら、初めてあつたときと同じ笑顔を見せる。俺は、何も答えることが出来なかった。

とりあえず、倒れている男二人に目をやった。みるみる地面に広

がつていく血だまりから考えても、二人が事切れているのは間違いない。　怒りが……込み上げてきた。

俺だってD階級の出身だ。死体なんてものは見慣れている。D階級には自殺者だっていっぱいいたし、ごろつき同士の喧嘩、薬のやりすぎ、アル中。何だって居た。けれども、知らない人間を、こんな風にあつさり殺す人間は居なかった。それに、殺さないと云ったじゃないか。殺さないと云ったはずだ。それが、キヤルのこだわりでプライドだったのでは無いのか？

「オズ？」

黙ったまま、木箱のかげから立ち上がりもしない俺にキヤルが声をかける。俺は、意識的に深呼吸をひとつした。

「大丈夫？　人が死ぬのを見るのは初めて？　階級持ちってそういうものののかしら」

よく、平然と聞いてくる。

「殺さないって言った」

俺は呟くように囁いた。

「え？」

キヤルが聞き返す。俺は、目の前が真っ赤に染まっていくのを感じた。

「殺さないって言ってただろ！　だからキヤルに着いてきたんだ！」俺はたまらず、声を荒げた。これだから俺はいつも、課長にあきられるのだ。

「何の話よ」

けれども、キヤルはそれにたじろぐ様子はない。

「キヤルは殺しをしない運び屋だって聞いたから、取材を申し込んだんだ。他のスラムの人間と違うと思った」

もちろん、殺しをやらないスラムの住人、なんてものを簡単に信じた俺がばかだったのだが。

「私、人を殺さないなんて言ってないわ」

キヤルはさり、と言った。

「言つてただろ」

「言つてないわよ。殺しの依頼は引き受けない、と言つたの。人を殺さないとは言つてない」

その二つの、何が違うというのだ。人を殺すということは、いかなる理由があろうとも人を殺すということなのだ。

「意外だわ。オズがそんな事言うなんて」

キヤルがポツリと言つた。

「何が？」

俺は、イライラした調子を崩さずに言つた。

「オズは、人はみんな平等だ、とか言いそうなタイプだと思つてた」

「そうだよ。人はみんな平等だ。だから、人が人を殺して良い理由なんて無いんだ」

「どうして？ 人がみんな平等なら、私にも彼らと同等に生きる権利があるわ」

彼らというのは、殺された黒服の彼らのことだろう。

「生きる……権利」

「そうよ。私にも、彼らにも平等に生きる権利がある。私が彼らに黙つて殺されてあげる必要はないわ。平等に命をかけた結果だわ」
俺は、頭がぐるぐると混乱してきたのをかろうじて自覚した。キヤルは続ける。

「それとも何？ オズは私が黙つて殺されるべきだつたと言つたの？」

それこそ不平等でしょ。私を殺そうとした人間に、私が同じだけの権利を主張するのは当然よ」

よく、分からなくなつてきた。確かに、キヤルの言っていることは間違つてはいないように思う。けれども、人を殺すのが悪いことだというのが間違いのほずもない。キヤルの理論を通すと、人殺しが正当化されて……。

「ま、いいわ。仕事の途中だし、私も難しいことは苦手だしね」

俺がよつぽど難しい顔をしていたのだらう。よろよろと立ち上がった俺に、キヤルが言つた。

「ああ」

俺は、適当な返事を返す。

「私もあなたも仕事だよ。集中して」

そう言われても、俺は何をしていたのか思い出すのに苦労した。俺が自分の本来の仕事を思い出したのは、キヤルが人の多い路を通り抜け、ネオンもすっかり影をひそめたうらぶれた通りに着いたときだった。

「ここ……」

俺は独り言のつもりだった。が、キヤルがしっかりと答えた。

「その階段を下りたところが届け先よ」

目の前に見える、見捨てられたようなビルの地下に続く階段を指差しながら言うキヤルは、すっかりいつも通りだ。俺達は、薄暗い階段を下っていった。一番下につくと、やけに頑丈そうな扉がある。

キヤルがそれをあけるとビロードのカーテンの中からガタイの良い男が手招きをする。素早くカーテンの中に滑り込むと、男がキヤルに名前を聞いた。キヤルがポケットから何かの紙切れをだすと、すんなりと中に入れてくれる。

「彼は？」

男の前を通りすぎるときに男が俺のことを聞いた。

「私の助手」

キヤルがよどみなく言うと、やっぱりすんなり通してくれる。どうやらキヤルは信頼されているらしい。

中は入り口と同じようなビロードのカーテンで覆われた細い通路になっていて、俺達はその奥に用があるのだという。途中、人の話声の聞こえる部屋を横切った。ビロードのせいで、声はくぐもり、人の姿も見えないが、俺はそこではっきりとここがどういった場所なのかを悟った。わずかにただよう甘い香り。この香りには覚えがある。

「キヤル、ここってもしかして……」

「しつ。さすが記者だけあって勘が良いのね。でも、黙っているの

が利巧だわ」

キヤルは微笑んだ。キヤルに従って、俺は黙って奥の部屋に通され、荷物の受け渡しを見守った。それは、あまりにもあっさりと終わり、俺達は何も見ず、何も聞かずにそこを後にしたのだった。

「阿片窟。だろ？」

スラムに戻る車の中で、俺は初めてキヤルに聞いた。

「正解」

キヤルは前を見たまま言う。もつとも運転をしているのだから、簡単によそ見をされては困ってしまう。

「金持ちの道楽か？」

俺が顔をしかめると、キヤルはそれを気配で察したのだろうか、少し口元に笑みを浮かべて

「まあ、そうね。私が運んだのは、下級階層に出回っているような粗悪品ではなくて、最高級品よ。依存性も少ないし、彼らはやり方も知ってる。たしなみみたいなものよ」

と言った。

「キヤルをおそった奴らは？」

この話題には出来るだけ触れなくなかったが、記事を書くのならそうもいかない。

「最高級品を狙う人間がいるのは当然だわ。だから私みたいにプロに運びを依頼するのね」

キヤルは始めから、自分が狙われることを知っていたのだ。ということは……キースも分かっていたに違いない。キヤルが狙われることも、人を殺すことも、そして、俺が勘違いをしていることも。

俺のスラムの取材の初日が終わった。スラムに着いたのは夜中だった。家の鍵は開いていた。考えるべきことはたくさんある気がするのに、俺はその日、夢を見るのも忘れて泥のような眠りに落ちた。

第四話 キャロライン2（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。
引き続き、ジャンルと感想をお待ちしております。
簡単でも良いので一言でもいただけると嬉しいです。
話はまだ続くので、どうぞお付き合いください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2843e/>

人殺しの街の優しい人達

2010年10月10日08時04分発行